

春爛漫の杜と水の都をふたりで

秋田県・四六・会社員

水沢道博

何年振りかで君に手紙を書けるなんて、心がうきうきします。いつも心ではいろいろ語りかけているのですが、こうして手紙を綴っていると、届いた頃にはほんとうに君の声が聞けるような錯覚を覚えます。

あと数カ月の命。死の宣告も知らずに、君はお氣に入りのブティックで目を輝かせ、「こんなに痩せてスマートになったのだから、もうなんでも着れるわ」と、いくつもの洋服を並べ、「これとこれ欲しいんだけどいいかしら。こんな贅沢は初めてね」今も店の前を通るたび、娘のように顔を綻ばせていた姿が目には浮び、胸が詰まりま

す。あれから八年。まだ幼かった子供達は、ついに一度も袖を通すことのなかったその洋服を着れるまでに成長しました。そして今、ふたりは君の姿をそのまま映しだして見せます。お姉ちゃん、顔立ちとしぐさ、それに声までもよく似てきました。菜

ちゃんは、几帳面で物事を最後までやり遂げる性格は、これまた君にそっくり。

もっと君を強く感じたい時、暇を見つけてはよく読書に耽っていた姿を思い浮べ、時々取り出しては読むのです。

びっしり詰ったその書棚の奥から思いもよらず、若かりし頃の君の日記を発見。そつと覗きました。若き日の心の軌跡は僕の心に焼き付きふたりの空白を埋め、また想いをよせた人との別れのページは、僕に嫉妬の念を抱かせ、君に笑われそう。

旅行の好きな君は、みちのく盛岡をこよなく愛していましたね。君と別れてから、その地をじっくり旅してみようと心に決めていたのですが未だ果たせずにおります。別れが間近に迫った四月。眩ゆく咲き誇る桜を全身で受けとめ見詰めていた君。大好きだったその季節に、ふたり手を携えてまで杜と水の都を歩いてみたい。あの頃の夢を語りながら。

*妻は仙台、私は秋田。デートコースはいつも中間の盛岡でした。手紙を書き終え、ようやく盛岡の地を歩けるような気がします。